

シリア難民支援

レバノンから……



バダウィ・キャンプ
の幼稚園

シリア内戦が勃発して3年になります。出口の見えない紛争は混迷を極め、戦火を逃れて国境を超える避難民の数は240万人。増加の一途をたどっています。「パレスチナ子どものキャンペーン」の支援拠点のあるレバノンには、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）によると、2014年2月現在、隣国シリアから90万人以上の避難民が流入しているといえます。この数は、レバノンの人口の20パーセント以上におよび、急激な人口増加と住居・食糧不足、物価上昇という形で隣国にもシリア内戦の影響が及んでいます。そして避難民の1割以上がこれまでシリアに住んでいたパレスチナ難民です。

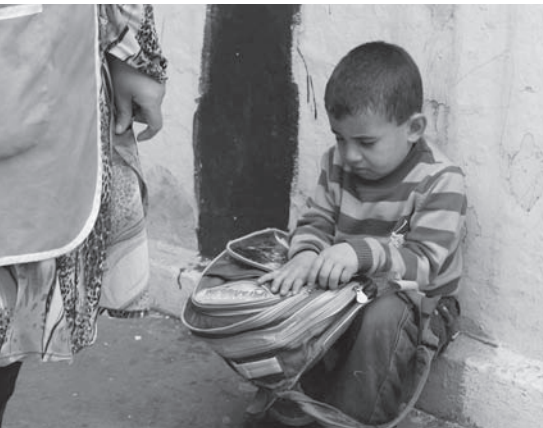
食糧難に悩む ワーベル難民キャンプ

首都バイルートから85キロほど内陸に入ったベカー高原では、雪化粧をしたレバノン山脈を背にブドウ畑や放牧中のヒツジの姿、のどかな風景が現れます。そんな高原地帯にあるパレスチナ難民キャンプ、ワーベルは人口3000人ほどの小規模なキャンプですが、その数をはるかに上回る3500人ものシリア避難民が押し寄せています。

私たちが訪問したガレージに住む家族は、幼い子どもを含む6人家族で、6平方メートル（4畳）に満たない窓も扉も電気もない真っ暗な空間に1年以上暮らしていました。都市部に比べて圧倒的に雇用機会の少ない地方では、十分な食糧を手にとることさえもままならない状況があり、1日1食という日も決して少なくないとか。

キャンプ内ではすでにガレージにも空きはなく、周辺の墓地や屋外プールに仮設住宅を建設し、わずかな居住空間に数世帯が共同生活を営んでいたりします。訪問した墓地周辺地域だけでも60世帯300人がこのような住居環境に1年近く暮らしていました。氷点下10度にまで冷え込む冬には、暖房が十分でなく命を落としてしまうケースも珍しくないそうです。

このような現状を前にUNRWA（国連パレスチナ難民救済事業機関）のアフマド・ムーサさんは訴えます。「難民も人間です。六畳一間より小さい窓もない、電気もない、あるのは地べたに敷かれた薄いマットと毛布のみ。こんな空間に身を寄せ合って太陽の光も届かない部屋で空腹と寒さを抱えてひたすら故郷に帰れる日を待つ。子どもたちがこの状況の中で、希望の光を見出すことができるのでし



ア避難民の子どもたちはほぼ100%が何らかのトラウマをおっているそうです。

ムハンマドくん(14歳)も、住み慣れた故郷を追われたシリア避難民で、ストレス障害の一つ「適応障害」と診断されました。レバノンの避難先の生活には馴染めなく、一日中家の中で過ごす時間が長くなり、孤立感を深くしていたそうです。

ました。カウンセリングが進められる中で、彼はシリアで親戚の死を目の当たりにしたことを口にしました。この出来事がトラウマの大きな要因の一つとなっているとドリーさんは判断し彼の心理サポートを進めていきました。

現在では、マラソン大会やサッカーチームへの参加を通じて、少しずつ避難先での生活に溶け込んでいって

ようか?」

出口の光が見える「希望」を子どもたちに与えなければならぬ。当会は、連携NGO「子どもの家」のワーベルセンターと共に、シリア避難民の子どもたちを対象に補習クラスを開講しています。シリアとレバノンでは教育カリキュラムが異なるため、避難先の学校の授業についていけない子どもや紛争の影響で教育期間に空白が生じているが子どもたちが多くいます。この補習クラスでは、このような子どもたちに今一度学ぶことの大切さと楽しさを教えると同時に避難先のコミュニティにおける仲間作りを応援しています。また、「子どもたちは空腹と戦っている」という補習クラスの先生の声に応じて、各家庭への食糧配布と子どもたちへの軽食配布も準備しています。

「故郷」を喪失した子どもへの心理サポート

レバノンの南部にあるファミリー・ガイダンス・センターでは、キャンプ内での避難生活や紛争の影響を受けて精神、心理的な問題を抱えている子どもたちに心理サポートを実施しています。内戦下で、家族や親しい友人を亡くした子どもも多く、犠牲者を目撃した経験を持つ子どももいるため、外出を恐れたり、言葉が減ったりと鬱症状に陥っているケースが多数報告されています。同センターの臨床心理士ドリー・コスタさんによると、シ



そんなとき、ソーシャルワーカーの勧めでムハンマドくんはドリーさんのもとを訪れました。先生は、とにかく彼の話に耳を傾け、彼の心を苦しめている要因を見つけるように努力し

るというムハンマドくん。

ドリーさんは、「現在でも『難民』という立場は変わったわけではないので、完全に適応障害を克服できたわけではありません。彼らは『ハウス(家)』を失って悲しんでいるのではなく、自分の居場所、そしてそれを構築していた人、風景、香り、木々など『ホーム(故郷)』を失って失望しているのです。よって、トラウマ治療には、非常に長期的な時間が必要とされます」と述べ、「難民」として生活している以上、改善は可能であっても、完治は期待されないと心理サポートの限界を指摘しました。

「私たちは同じ難民だ」

ベイルート市内にあるブルジバラジネ難民キャンプにも、紛争下でつらい体験を繰り返し、慣れない土地に移動してきたシリア避難民の子どもたちが多く暮らしています。当会では、そんな子どもたちの心理サポートを目的としたドラマクラスを開講して



います。

子どもたちが演じるストーリーは、内戦下で自分自身が実際に遭遇した体験がもとになっています。内戦で家族や友人を亡くしたときの様子を再現している場面もあり、練習中につらい体験を思い出して涙を流してしまう子どもたちもいました。それでも、子どもたち自身の「周囲に思いを伝えたい」という強い意志を尊重して練習を続けました。その過程で、内面に押し込んでいた不安や悲しみを吐き出しつらい記憶を語ることで、同じような体験を持つ仲間と共感し、苦悩を分かち合うことを彼らが求めていたのです。今年1月に開かれたドラマ「Journey of my life (私の人生の旅)」

の発表会は感動的でした。

「自分たちも同じ難民、パレスチナ人なんだよ」。物価の上昇や住環境の悪化などによりシリアからの避難民に向けられる視線が厳しくなる中、子どもたちが一番伝えたかったメッセージです。半世紀以上も異なった環境で違う歴史を歩んできたシリアのパレスチナ難民とレバノン在住のパレスチナ難民。彼らがシリア内戦という新たな戦火を経て再び出会ったとき、いつの間にか両者は「シリアの～」、「レバノンの～」

のいう別のカテゴリーでお互いを認識するようになっていました。キャンプ内にも生まれた差別に遭遇した子どもたちは、故郷を追われた者、難民としての境遇はみんな共通だと訴えたのです。子どもたちの発言一つ一つに暖かい拍手が沸き起こり、涙を浮かべる保護者の方も大勢おられて、舞台と客席が一体となった会場では、最後まで子どもたちの演技を見届けようと観客であふれていました。

演劇を通じて、同じような境遇に置かれている仲間に出会い、互いに支え合い、励まし合ってきた子どもたち。紛争下で父親を亡くし「お人形になりたい。そうしたら、悲しみも感じなくてすむから」と語っていた11歳になるマラクさん。ドラマの中では体験に基づいた大好きなお人形を失う役を演じ、練習では何度となく涙を流してきましたが、クラスを通じて同じような境遇にある仲間と出会い笑顔を少しずつ取り戻してきました。舞台でも堂々と演技切り、心理的に安定してきたことが分かりました。また「避難民」という言葉の出てくる演劇の練習の声を聴くたびに、参加者の一人のお祖母さんは、耳をふさぎたくなるといいます。自らが「避難民」という立場に置かれているという現実を受け止めることができなかったからです。しかし、ふさぎ込んでいた子どもたちがドラマクラスに通い、生き生きと明るさを取り戻していく姿を見ると、祖母自身も笑顔を取り戻すことができたと言ってくれました。

